

知人や教え子から時々、「本を紹介して。」なんて頼まれることがあります。本を紹介するって、結構大変ですが、楽しみでもあります。



一方、頼まれもしないのに「これ、読んだら。」なんて紹介したくなる(押しつけたくなる)ときがあります。しかし、こっちの思いだけで押しつける本が読まれることは少ない。だから、自分が気に入った本でも、安易に人に押しつけるのは自制しています。それでも、つい、「この本、読んだら?」と言ってしまう相手がいます。



一人は、わが息子。小学校のころは、怖い母親の影響下(支配下)にいましたから、一応、本は読んでいたようです。しかし中学校に入って読書量は激減。息子の部屋にある本といえば教科書とマンガだけでした。

そんな息子も今は25歳を過ぎる社会人。年に数回、予告もなしに東京から帰省してきますが、近ごろ私の本棚から勝手に本を持っていくようになりました。で、東京に帰ってから、「この本、借りたけん。」とラインが入ったりします。

彼が中学生だった頃からずっと本を押しつけていたのに、ぜんぜん見向きもしなかった。ところが、東京でいったい何を食べたのか、突然読書に目覚めた様子。年末に帰省した時には、「怒らないこと」(A・スマナサーラ)にいたく感銘を受け、『人生が変わった。』とのたまう始末。やはり何か悪いものを食べたに違いない。

二人目は、甥のNちゃん。真面目で勉強家で賢い。読書が好きで、物事を深く考える。およそ久村家には棲息しない人。普段から、けっこう難しい本を読んでいたNちゃんが中学2年生のときに押しつけたのが、「フーコー入門」(中山 元:ちくま新書)他数冊のフーコー本。難しい内容でしたが、彼はあっさりと読破。

以来、大学を卒業するまで、私が薦める本をすべて読破してきました。

Nちゃんの中学・高校時代に私が紹介した本は、
 「武士道」(新渡戸稲造)
 「デンマーク国の話」(内村鑑三)
 「アメリカインディアンの教え」(加藤諦三)
 「自分に気づく心理学」(加藤諦三)
 「夜と霧」(V・フランクル)
 「沈黙」(遠藤周作)
 「自分の小さな『箱』から脱出する方法」(アビンジャー・インスティテュート)
 「自分が『たまらないほど好き』になる本」(J・ウ

ェインバーグ)

「無情の見方」(A・スマナサーラ)

「老師と少年」(南 ^{しまい}直哉)など。

大学生になった時には、まず「構築主義とは何か」(上野千鶴子)を紹介し、続いてK・J・ガーゲンやN・チョムスキーなどのノンフィクション、城山三郎などの社会・経済小説を読むように勧めました。

そんなNちゃんも今は社会人となり、近ごろは私が薦めたい本を、すでに読んでしまっているようになりました。

Nちゃんの母は私の姉。幼いころから読書家で、今もよく本を読んでいます。そんな姉がある時、「Nは私が紹介する本はひとつも読まんのに、何であんたが紹介する本は読むの?」と聞くので、「そりゃ人徳でしょう。」とあしらったところ。「・・・真面目に言っとるん?」とイラつかれてしまい、三角になった姉上の目が本当に怖かったので、真剣に考えてみました。

・・・読書家ぞろいの姉の家庭では、読書環境づくりは十分。でも、姉とNちゃんとは読書傾向がすごく違う。だから、Nちゃんの興味を惹きそうな本を紹介するのが難しい。だったら、Nちゃんに「面白い本、教えて。」とお願いするのはどうだろう。つまり、息子が母に本を紹介する・・・

わが姉は、この秘策でNちゃんの読書仲間復活。姉の子離れは遠のきましたが、ご満悦でした。

その後この秘策は、数々の実証実験を経て有効性が確かめられ、同時に失敗事例も収集できました。よくある失敗例。

母 : 「面白い本、教えて〜♪」

息子 : 「知らん。」 ⇒ 母大暴れ

・・・やっぱり、まずは親が読書を楽しむ(「楽しそうに」とか「熱中して」というのがいいかも。

と、まあ、もったいぶった割には、実にフツウの結論となってしまいました。まことに恐縮です。